
銀魂 生きるコト

夜三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 生きるコト

【Nコード】

N5618V

【作者名】

夜三

【あらすじ】

これはまだ、吉田松陽が死んでしまっ前の話。

坂田銀時は松陽に拾われ、沢山の出会いがあった。

この小説は、松陽先生が亡くなる前の話。松陽の寺子屋に住む銀さんと、高杉や桂などまわりの人達が巻き起こすドタバタコメディー
!!!

いままで一人で生きてきた銀さんが、いろんな人とのふれあいによってだんだんと生きる希望が見えてくる、、、。

「生きる」「ト」はどじゆじゆ事なのか、銀時はだんだんと気づいてゆ
く。

プロローグ(前書き)

第一話とつづいてっっ!!

プロローグ

? 屍かばねを食らう鬼が出ると来てみれば君がそう

?

先生の最初の印象は、また、か、、、だった。

刀を持った人たちはたまに来る。

なぜこんな死体がごろごろ転がっている所に来るのか最初は分からなかった、けど、、、

『鬼』

来た奴らはみんな、俺の事を鬼と呼ぶ。

最初に来た奴が刀を抜いて俺にむかって振り落としてきたから、俺は反射的にそのへんに転がっていた刀でそいつ刺した。

それから、俺の所に人が沢山来るようになった。

俺を殺そうと

。

だから俺は躊躇ちゅうちゅうなく、相手を刺した、切った。

「よくも俺の父親をつっ!!!」と言いなから切りかかって来た奴もたまたま居たけどそいつも躊躇ちゅうちゅうなく殺した。

人を殺す事に罪悪感ざいあくかんなんて全然無かった。

先生と出会うまでは
。

「屍を食らう鬼が出ると聞いて来てみれば、、、、、君がそう？」

またか、、これが始めの第一印象。
でも違う所もあった。

笑顔、だった
。

すいこまれてしまいそうに優しい笑顔。
だけど知的でもある。

こんな奴初めてだったけど、別に関係ない。
俺を殺そうとするなら、殺す。

「またずいぶんと、可愛い鬼もいたものですね」

ポン。

男は俺の頭に手を置いた。

柔らかくて温かい手

。

今まで、冷たい死体しか人間に触ったことしか無かったから、こんなに人間とは温かい事を俺は初めて知った時だった。

だけど

。

パシッ！

俺は頭にのせられた手を振り払うと、そいつから一メートルぐらい離れた所まで後ずさりし、剣を抜いた。

「刀も屍からはぎとったんですかと笑顔で言った。

なんで笑っているのかが分らない。

俺はおもいつきりそいつを睨んだ。

だが、そいつはゆっくりとした口調で続ける。

「童一人で屍の身ぐるみをはぎ、

そうして自分の身を護ってきたんですか、
大したことじゃないですか、。、。

ですがそんな刀、もういりませんよ」

そいつは腰の刀を抜かずに持つと、
優しく笑いながら言った。

「他人^{ひと}におびえ、自分を護るためだけにふるう刀なんて、
もう捨てちゃいなさい」

ひょいっ

「!?!」

そいつは持っていたを刀が俺の方に投げた。
俺は思わずその刀を受け取った。

「?????」

どうゆう意味が分らなくて、テンパってしまっ。

俺はそいつを見ると、そいつは背をむけた。

「これからは剣^{けん}を振るいなさい。

敵を切るためじゃなく、弱き己^{おのれ}を切るために

。

己の魂を護るために
「。」

己の魂を護るために
？

「この意味が知りたいのならついて来なさい」

？己の魂を護るために

俺はこの言葉にひかれた。

プロローグ（後書き）

短いすね、（一・一）

この小説は、私の書いているもう一つの小説と両立していくので更新が遅くなるかもしれません、。

第一話 朝は誰だって弱いはずだ。うん。(前書き)

ねむい、、、、、(…)

第一話 朝は誰だって弱いはずだ。うん。

季節は春。

今日は晴天。

太陽からは温かい日が降り注いでいる。

草むらにはバッタやモンシロチョウやモンキチョウなど、春らしい虫がいる。

(もう完全に春だな)

桂はそう思うと、寺子屋に向かって走り出した。

「先生ー！おはようございますー！..」

寺子屋に着いた桂は、ガラガラガラツと音をたてて玄関の引き戸を開けた。

「小太郎、おはようございます」

そう言いながら、奥の部屋からひょこりと松陽が顔を出した。

「えらいですね、いつも早くに寺子屋に来て。今日は小太郎が一番ですよ」

松陽が笑顔で小太郎に言うと、桂は照れたような笑顔をみせて笑った。

桂はぞおりをぬいで、教室に向かった。

教室の戸を開けると、さっき松陽が言ったとおり桂が一番に来たらしく、誰も居ない。

桂は自分の席に座ると持ってきた筆記用具などを机に置くとはもやる事が無い。

今日も早く来たのは良いが、別に何もすることが無い。

松陽先生に何か手伝う事は無いか聞こうと立ち上がった時、

「小太郎ちよつと、頼んでも良いですか？」

教室にひよこりと松陽が現れた。

「はいっ、なんでしょうか」

桂は急に現れた松陽にちよつとびっくりした。
まあいつもの事なのだが、。。。

「先生。頼み事ってなんですか？」

「銀時を起こしに行ってくれませんか？」

松陽に頼まれ、いいですよと桂は言つと教室から出て行き銀時の部屋まで歩いて行った。

松陽は笑顔でお願いしますねと言い、自分の部屋に戻った。

一方桂は、。。。

(なんでアイツを起しに行かなきゃならないんだ、。。)

と、銀時を起こしに行くのが嫌だった。

朝一番に寺子屋に来ると必ず銀時を起こしに行かなくてはならない。だから、いつも一番にどつちが寺子屋に来るかど張り合っていた高杉も、もうちょっと遅く来るようになった。

なんで嫌かというところ、

桂は銀時の部屋に着きふすまを開けると、まだ布団にくるまってよだれをたらしながら寝ている。

「おい、銀時起きろ。朝だぞ」

桂は銀時の体をゆすりながら声をかけても、起きる気配けはいは無い。

桂は、はあと溜息をつくと起こそうと掛け布団をめくろうとしたが、

とれない……。

銀時が、がっちりと掛け布団をにぎっているから、とれない。

カチン。

頭にきた桂は、銀時が寝ている布団の下布団を両手に持つと、

「起ーきーろー、銀時ー！ー！ー！」

と言いながら、思いっきり引っ張った。

体重の軽い銀時は、ごろごろと掛け布団ごと転がっていった。そして壁に激突した。

「ってー！ー！何すんだよズラッ！ー！ー！」

「ズラじゃない桂だ！何時まで寝ているつもりだっ！ー！」

壁に激突して飛び起きた銀時がキレる。桂もキレる。

「るせー！日本人は土日は昼まで寝て良いつて決まってるんだよ！ー！ー！」

「そんな決まり無い！だいたい今日は月曜日だっ！ー！ー！ー！」

ギャーギャーと言いつ声、何も無い田舎に響く。

今週も、騒がしい一日が始まる。

第一話 朝は誰だって弱いはずだ。うん。(後書き)

来週高杉出てきます!!

第二話 スパゲッティが食べたい。(前書き)

更新遅くなってすみません!!

第二話 スパゲッティが食べたい。

(まったく！ホントアイツは…)

銀時をやっと起こし、イライラしながら廊下を大股おおまたで歩いているのは、桂小太郎。

綺麗な黒髪を後ろの高いところで一つに結び、顔立ちはとても整っていて、一見少女いっけんに見える容姿ようしだがちゃんとした男子だ。

スー…

桂は教室の前につくと静ひいに襖すまを開けた。

だって静かに開けないと先生に怒られるもん。と可愛く書いてみたがスルーしてもらって構わない。

桂が教室に入ると、数人の生徒が来ていた。

耳をすませれば、今も玄関の方でガララツと戸が開く音がした。

桂は早く来たのだが、銀時を起こしているうちに皆が来る時間になつてしまったようだ。

教室に居た奴らが、桂に気がつき「おはよー、ズラ！」と声をかけ

てきた。

俺は「ズラじゃない、桂だっ」と強い口調で言うと、自分の席にストーンと正座して座った。

アイツ：銀時が来てから、皆は桂の事を「ズラ」と呼ぶ。

なんでかって？回想いってみる？

じゃあ回想

銀時がこの村塾に来た日。

皆は銀時を受け入れずにいた。

そりゃそうだ、あの銀髪に紅い瞳をした人間は初めて見たから。

こちら辺の田舎には、黒髪か茶髪が普通だし瞳の色も紅の色なんて見たことも無かった。

桂も銀時の容姿にはびっくりした。

いままで本などで、天人などはこういう容姿だと書てあったので天人は人間と違う容姿だとは知っていた。

だが実際にナマで見たのは初めてだった桂や皆、隣の席の高杉も驚いているようだった。

天人かと一瞬とゆうか天人だと思ったが、見た目は髪の色と瞳の色以外は自分たちとはあまり変わらない子供だ。年齢も同じくらいだろうか？身長も自分達とさほど変わらない。

松陽先生が銀時に自己紹介をさせ、一番後ろの窓際まどぎわの席に座らせいつもどつりに授業を行った。

だが、皆授業中に銀時の方をちらちらと見たりしていた。

一方銀時も落ち着かないようで、先生の方をじっと見て困った顔をしてしていた。

休み時間。

皆、銀時の事をヒソヒソと聞こえないように話していた。ちなみに先生は次の授業の準備で教室にはいない。

『俺、あんな髪の毛の色した奴初めて見た』

『俺も、とゆうかアイツ人間なのかな？』

『えー、もしかして天人って奴？』

『でもこんな田舎にいない訳ないじゃん』

いろいろな例があがるが、どれも違う。
冷静に考えれば、アイツは

「あいつは人間だよ」

「！」

発言した奴の方向に皆目を向ける。

発言したのは、高杉晋助。

紫っぱい黒髪に、少しきつい目つきの男だ。
この教室では一番知識がある。

「高杉―なにを根拠に言ってるんだよ」

高杉の発言に反応した男子が高杉に聞いた。

第二話 スパゲッティが食べたい。(後書き)

お腹すいたので、ここで終わります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5618v/>

銀魂 生きるコト

2011年10月9日03時26分発行